

開催中の特集展示「織田昇追悼展-旅と思考から生まれた絵画」に合わせて、担当学芸員がギャラリートークを行いました。

ご息女である小田野梓様よりお聞きした貴重なお話を元に、織田昇の画業について、紹介させていただきました。



## つきいちアート6月 ギャラリートーク 「織田昇の画業」 レポート

2017.6.24



展示作品を一枚一枚、解説していきま  
した。

織田は1927年に平野村（現岡谷市）に生まれました。17歳で終戦を迎え、その後1948年に諏訪市美術館の前身である、諏訪美術館にて開催された展覧会にて名だたる芸術家の作品を間近に鑑賞し感銘を受け、美術の道を志しました。諏訪市美術館運営委員を20年近く務めるなど、当館とも深い関わりのある作家です。2016年に惜しまれつつご逝去されました。

師事した洋画家の小林和作から、「万巻の本を読め」と言われ、実践していたという織田は、様々な分野に造詣が深かったと言います。また、旅行によく出かけ、旅先のスケッチを元に油絵を描くことが多くありました。自分の描きたいものを描けば良い、という織田の描き方は、半分心象風景のような部分もあるとのこと。

様々なエピソードから、戦争体験の影響、知識への探究心、芸術にかける情熱など、織田の想いが伝わったのではないのでしょうか。



奈良はつながりが深く、奈良を題材と  
した絵が多く残っています。



たくさんのお客様にご来場いただきま  
した。

ご参加くださった皆様、また貴重なお話を伺いました、小田野梓様、ありがとうございました。

「織田昇追悼展-旅と思考から生まれた絵画」は、7月26日（水）までです。「まだ油彩というものがメジャーではなく、試行錯誤の時代だった」という初期の作品から、旅先で描かれたスケッチや画材、2008年に受賞された紺綬褒章の記章なども展示されています。ぜひお越しください。